

永

六輔

妻は夫にさからいつ
夫は妻をいたぶりつ

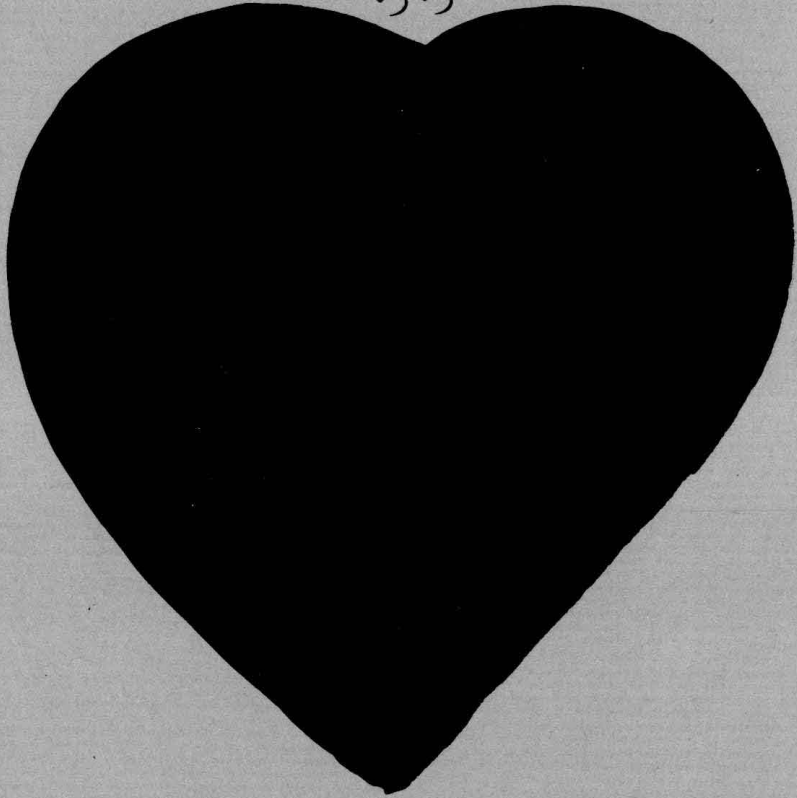
永

昌子

永昌子

妻は夫にさからいつ
夫は妻をいたぶりつ

永六輔





装幀・挿絵 山下勇三

まえがき

読者とは無縁のことながら――。

二人の御婦人にこの本を贈りたい。

永千絵14才。

永麻理12才。

永六輔という男と、酒井昌子という女がヒョんなことから一緒に暮すようになって、その結果、生れ育ってきた御婦人だからである。縁は異なものというか、夫婦は異なものというか。

この御婦人達の為に、僕は持つべき責任を果さなければならぬ。親としての責任。大人としての責任。

こう書くと「二度と飢えた子供の顔をみたくない」と参議院議員選挙に立候補した野坂昭如の心情に胸がつまってくる。

僕達は焼跡で飢えた世代である。

ひもじさに泣いた僕達の思い出したくない過去が、今度は未来に待ち構えている。

靖国法案。刑法改正。

遠くだが、確実にファッショムの靴音が聞こえている。

僕達の世代なら誰にも予知出来る不安であり、危機感だ。

七四年の参院選挙運動中のことだった。

渋谷駅前での野坂昭如の選挙カーの屋根の上で、群集の顔ひとつひとつを見つめていたら、そこに昌子の顔があった。

彼女は野坂の言葉をジッと聞いていて、その隣にいる亭主の方は余り見ようとしなかったが、それでも僕には感動的だった。

群集の中の女房。

あらためて夫婦というのは妙なものだと思った。

男と女しかいない世間で、どうして、この女が女房なのだろう。

一緒に暮そうということ、婚姻届けを出したり、結婚式を挙げたりすることは、全く別のことである筈なのに、どうして。

僕には家があり、そこには昌子、千絵、麻理という三人の御婦人が仲良く暮している。

一家そろって幸福そうな家族をみると「これは嘘に違いない、みんなで無理をしているに決っている」と思う僕だから自分の家のことも同じように考える。

夫と妻、親と子、これは宿命的なライバルであり、常に戦っているのが本当だ。

国家、又は民族同士の戦争とは違うのだから、個人は戦うべきと僕は信じている。

要するに家族は仇敵同志。

そのことに感動しなければいけない。

妙に手をつなぎあつた味方同志と思うから裏切られたりして悲しむ破目になる。

敵は常に敵であり、絶対に裏切ったりはしない。

だからこそ、敵は信用出来る。

信用出来るから一緒に暮すことが出来る。

この本はその当面の敵、昌子を相手に今は無くなった「フロリア」誌上でお互いにゆずることなく激論した一冊である。

そして、僕達の素晴らしい仲間の一人、同時に素晴らしい敵の一人、山下勇三のイラストレーションが、公正・冷静を忘れ、独断と偏見に満ちた参加をしている。

千絵、麻理、二人の御婦人はまもなくこの本の内容がわかる年頃になる。

その上で母親はどうでもいいからますます父親を尊敬するようになる。

僕は二人がいつまでも愛らしい敵であってほしいと思う。
その為にも、いつまでも昌子の味方であってほしい。

昭和四十九年九月

永 六輔

目次

まえがき——2

夫の・妻の 掃除洗濯——13

夫の・妻の 冷蔵庫——21

夫の・妻の お洒落——29

夫の・妻の 友達——37

夫の・妻の 「××タイツ話」——45

夫の・妻の 初体験——53

夫の・妻の 洋服——61

夫の・妻の 娘の教育——69

夫の・妻の 道楽——77

夫の・妻の 有名税——85

女房その世界——93

旦那その世界——103

夫の・妻の 仕事論——113

夫の・妻の 言葉遣い——121

夫の・妻の 仲人談義——129

夫の・妻の ストレス——137

夫の・妻の 家族旅行の夢——145

夫の・妻の 沖縄旅行——153

夫の・妻の アメリカ旅行談——165

夫の・妻の 猫の話 — 173

夫の・妻の 健康 — 181

夫の・妻の 旧婚旅行 — 189

夫妻対談 — 203

歌手・永六輔 — 213

あとがき — 239

写真撮影

横井隆和
谷津富夫

妻は夫にさからいつ

夫は妻をいたぶりつ

夫の
妻の
掃
除
洗
濯

●六輔

新しい電気掃除機がきた。

今迄のは自動車みたいな騒音を発して、掃除をしている時の昌子と呼ばうと思ったら、絶叫しなければ聞こえないという代物だった。それが寿命だったとみえて動かなくなってしまったのである。そして新しい掃除機、これが音がしない。

昌子は暇があると、小犬をつれて散歩でもしているような感じで、掃除機をひっぱり歩いて歩き、珍しく歌なんか歌っている。新しいものを買ってこんなに喜んでるのは、この十年みたことがなかった。

母親がニコニコしているから、千絵や麻理も、ほっとして勉強の手を抜き、テレビで映画をみてばかり。

猫も掃除機にじゃれたりして我家は秋も冬も通り越して春のようだ。

昌子は掃除マニア、レストランのおしぼりでテーブルはおろか椅子まで拭いてしまうという人物。掃除さえしていれば機嫌のいい女だ。だから潔癖症かという、そうでない。

早い話が不潔きわまりない男と一緒に住んでいることでもわかる。

清潔にする作業が好きなのである。つまり、不潔なのが好きなのである。

不潔でなければ清潔に出来ないのだから、散らかっていたり、汚れたりしていると、もう嬉しそうにしている。

表面は「いやあねェ！」なんていつてるが、心の中では「さあやるぞォー！」といっているのだ。

掃除とくれば洗濯も同じこと。

僕は汗っかきだし、旅も多いから下着の汚れが特に激しい。着替えようと思ってブリーフを出しておくと、その出しておいた新しいブリーフを洗ってしまう。夫のものは全部汚ないと思うているから、たしかめないで洗ってしまう。結果として僕はブリーフを替えることが出来ないばかりか、ブリーフは使用して痛むんではなくて、洗濯で痛んでしまうことになる。

自宅にいとブリーフ一枚というのが僕のスタイルだから、現状では常にだらしないことになっている。

さすがに僕自身については諦めていて「顔を洗いなさい」とか、「歯をみがきなさい」とかいわなくなった。